

成人向



factor

factor

【要素・要因】

意：何か成り立つために必要な事柄
主な原因

N 県 K 市 都会の喧騒を離れ、住宅街の一角

汐美 鈴花(●歳)●学●年生

母親・香蓮(38歳)と義父・護(32歳)の3人家族

香蓮は鈴花が5歳の時、護と再婚

護は6歳年下だが面倒見がよく鈴花を可愛がっていた
香蓮は小さいながらもジュエリーデザインの本社を
経営している。

仕事は忙しく、家を不在にすることも多い

母親不在であっても義父と仲良く過ごせる鈴花は
幸せであった。

護はテレワークの在宅勤務で鈴花と過ごす時間が多く
しかしながら、香蓮との時間が少なく有り余る若さを
持て余し、ほんの出来心で鈴花に悪戯をしてしまう。

鈴花も良く解らないまま護の行為に遊びとして
身を任せてしまう

行為は徐々にエスカレートし鈴花が●歳の時、
護の手により処女喪失

以来、鈴花は護の性欲処理の玩具として性技を
教え込まれる

フェラチオを始め精飲、アナル性交、

軽度なSM、異物挿入責め、バイブとローターを

膣に入れたまま夜のドライブと手を変え品を変え
鈴花が性奴へと変わっていくのを楽しんでいた

今夜も二人は風呂に入り

鈴花の小さな身体に終わらない快樂の悦を求め
精を注ぎ込む

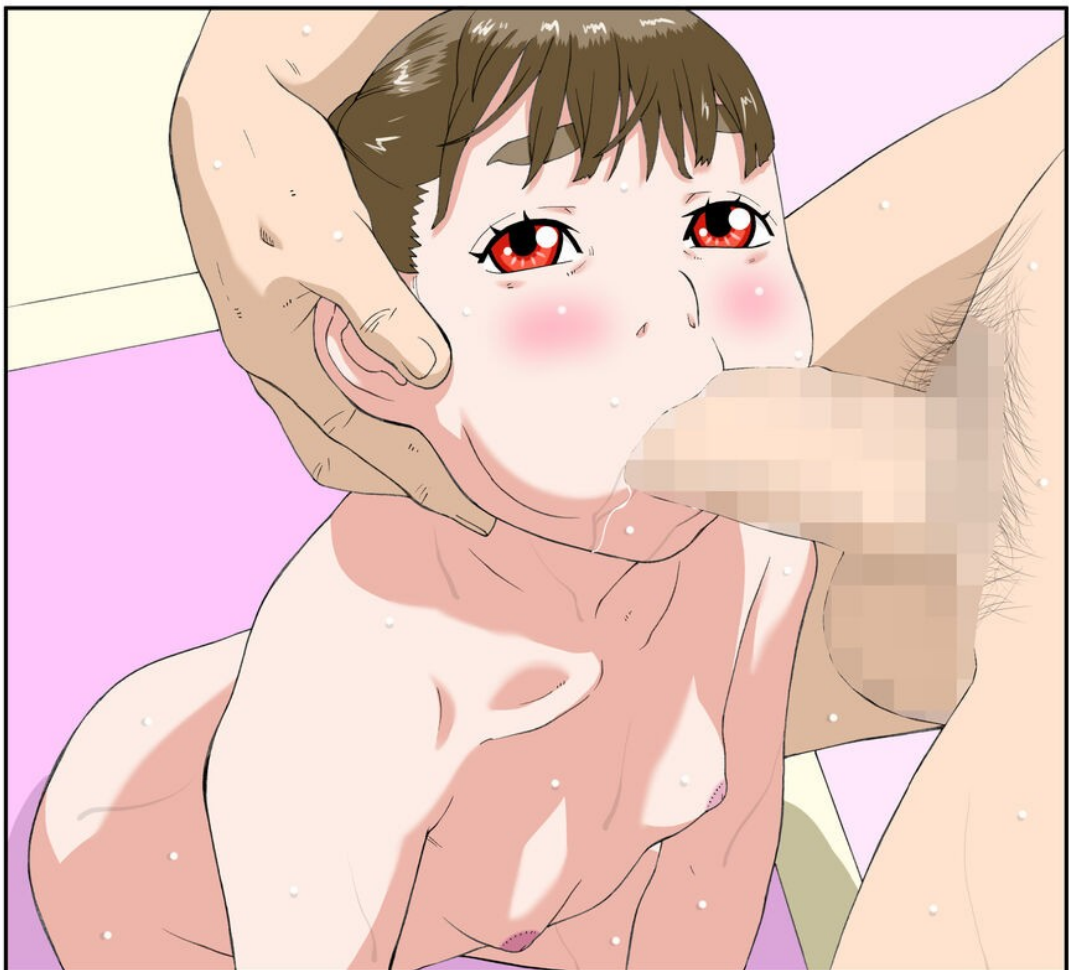
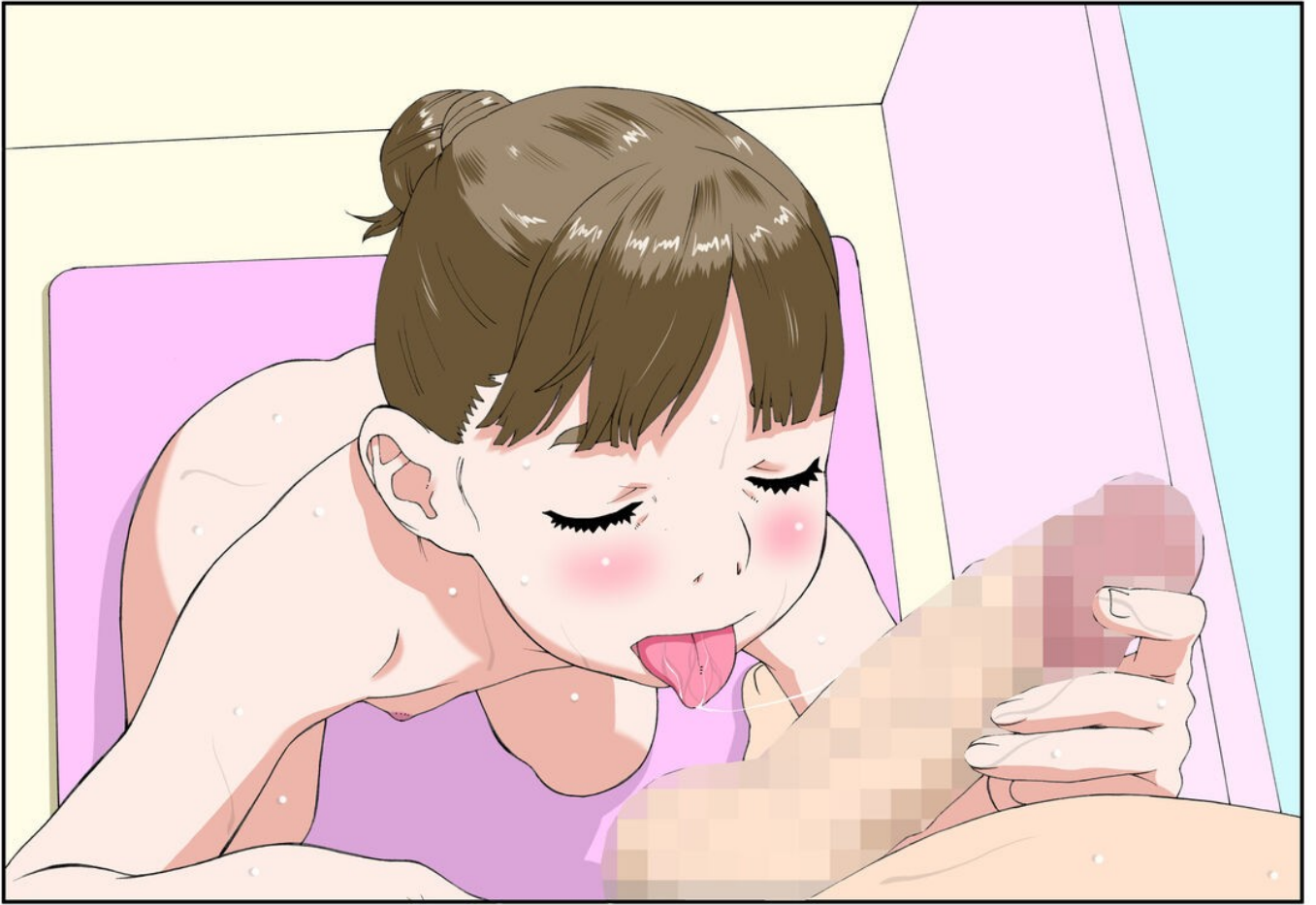
「ほら、鈴花…もっと喉の奥まで入れるんだっ」

「パパっ…こんな大きいの入らないよぉ」

「イクよ…鈴花 口に…開けて!」

「うん…パパっ!」

勢いよく飛び出したザーメンが鈴花の顔に
ぶっかけられる





半年後

香蓮と護は離婚をしてしまう

原因は夫婦のすれ違いと護がテレワークで知り合った取引先の20代OLと不倫関係になってしまったことだ

幸いなことに、鈴花との肉体関係は

表ざたにはならなかった。

一番驚いたのは鈴花だった…義父として、男として

さんざん弄ばれ未熟な身体に女としての快楽を

目覚めさせられ、調教されることを望んでいる身体に

されたまま、張本人が目の前からいなくなったことだ。

おろん、母親には言えず鈴花はどうしたらいいのか

途方に暮れてしまう。

新学期手前の春休み

4月より●年生になる鈴花

隣町の外れにある公園

小さいころ義父によく連れられてきた思い出の公園
町外れにあり人影も少なく、最近ではホームレスも
何人か住み着いて整備も滞っている。

藪が生い茂り、朽ちかけたベンチの隅に一人

座っている鈴花

そこに、一人のホームレス男が立ち、小便をし始める
鈴花に気を留める様子もなく、おもむろにチ○ポを
出す

「何だおめえ、何見てんだ…あっちいけっ」

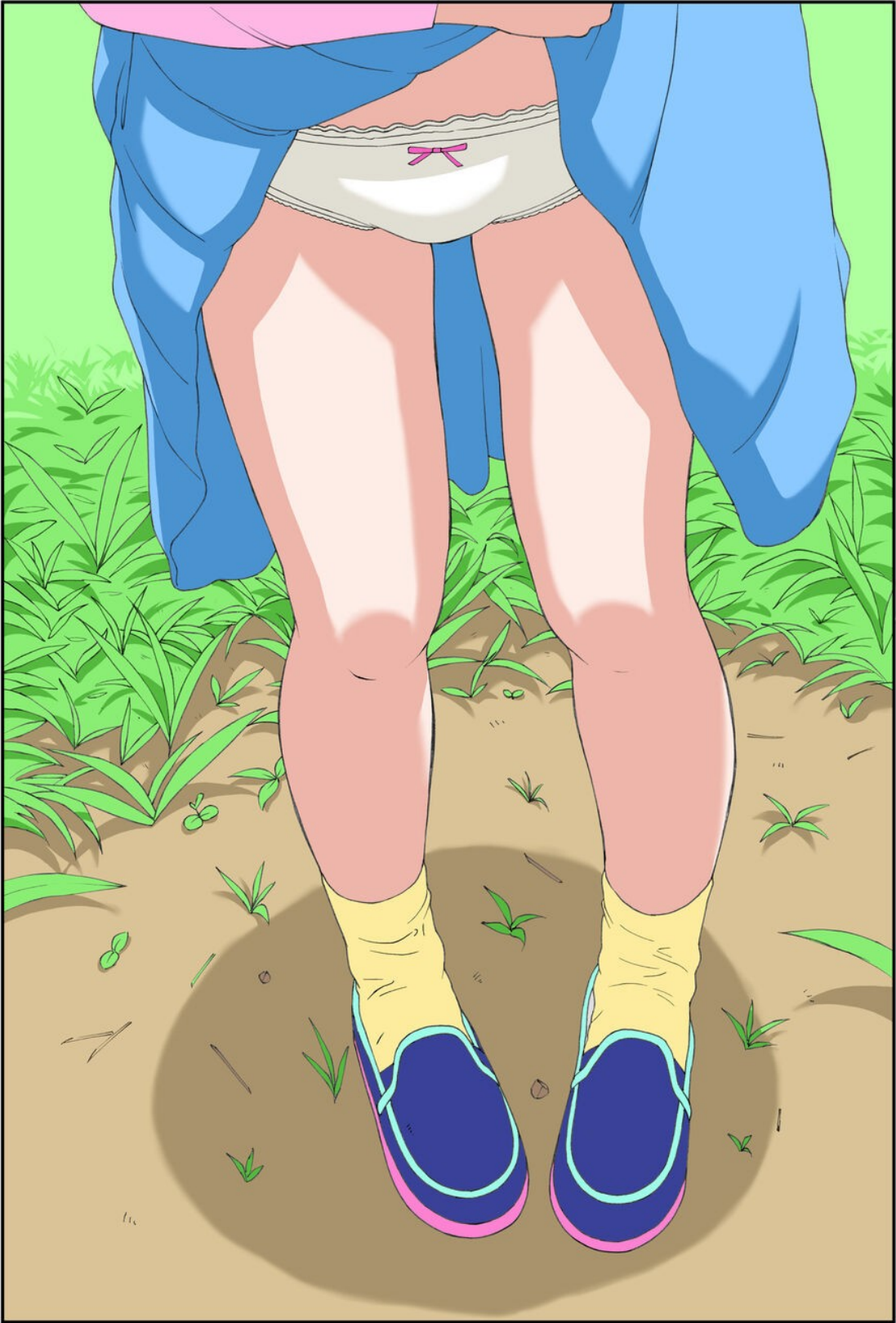
一通り出し終えると藪の奥にたたずむ小屋へと
戻っていく

鈴花は男のチ○ポを目の当たりにし護を思い出す

男は小屋から出てくると洗濯物を干しだす

鈴花は男のもとへと吸い寄せられるかの様に

足を運ぶ



50代半ばのホームレス男、この辺りでは「源さん」で通っている

鈴花は源に声をかける

「あっ…あ…の…」

「なんだ？？なんか用か？」

鈴花はいきなりスカートをたくし上げパンツとパンツからスラリと伸びた細い脚を源に見せる

「なにやってんだ、おめえ…」

「虫に刺されてかゆいの…」

「ああ？頭おかしいのか…おめえ」

「パンツの中…刺されて」

●供とは言えパンツを見せられて少し照れ臭そうにチラ見しながらも目を伏せる源

「なんだ？俺にかいてほしいんか？」

鈴花は源の言葉にゆっくりうなづく

あたりを見回し他に人影が無いか確認すると鈴花に小屋の中へ入るように首を振って促す

小屋は3×4畳ほどの広さがあり、大人一人が立てる高さがある、床はベニヤ板の上にブルーシートを敷いて万年床。

一通りの調理器具や荷物で埋まっている感じである

鈴花は万年床の布団に座らされそれを覆うように減が後ろから座る。

「どこをかいて欲しいって…」

「…なか…」

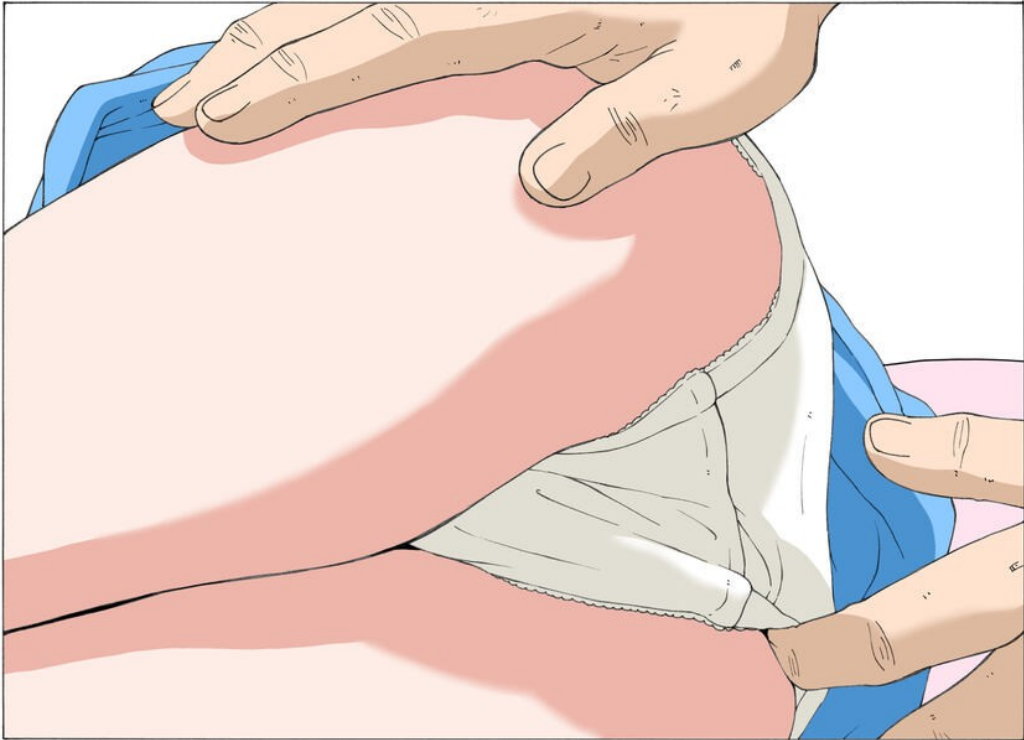
「おめえ、わかって言ってるだろうな…ん？」

「かゆいから…」

源は鈴花の首筋の匂いを嗅ぐ、ほのかな石鹼の香りに少しコーフィン気味に鼻息が荒ぐ

「最近のガキンちよは…色気づいてんな」

減の鼻息が首筋に触れると鈴花も鼓動が早まる



源は鈴花を布団の上に横になるように促す

鈴花のスカートをめくりあげると露わになった

色白の太ももを弄り、パンツの上からお尻や

股間を指や手のひらで揉みしだく

「ここか？　ここがかゆいんか？」

「…そこ」

小さくうなづく鈴花

脚を開かせパンツの隙間から性器をいじり始める

鼻を近づけ性器の匂いを嗅ぐ

「いっちょ前に女の匂いさせてるな…」

パンツを脱がせ艶を帯びた肉壁を筋に沿って

開いたり閉じたり深く浅く指を沈める

ぬるぬるした体液が肉壁からあふれ出る

「ここがかゆいんか？」

「そこの奥…なかの方…」

源は鈴花の言葉に一唾を飲み

「指入れても平気か？」

「…だいじょうぶ」

源は指を一本二本と増やし膣口から少し奥へと

入れ弄り中をかき回す。

指の動きに合わせて鈴花は荒めの吐息を漏らす

敏感な部分にあたると押し殺していた声が

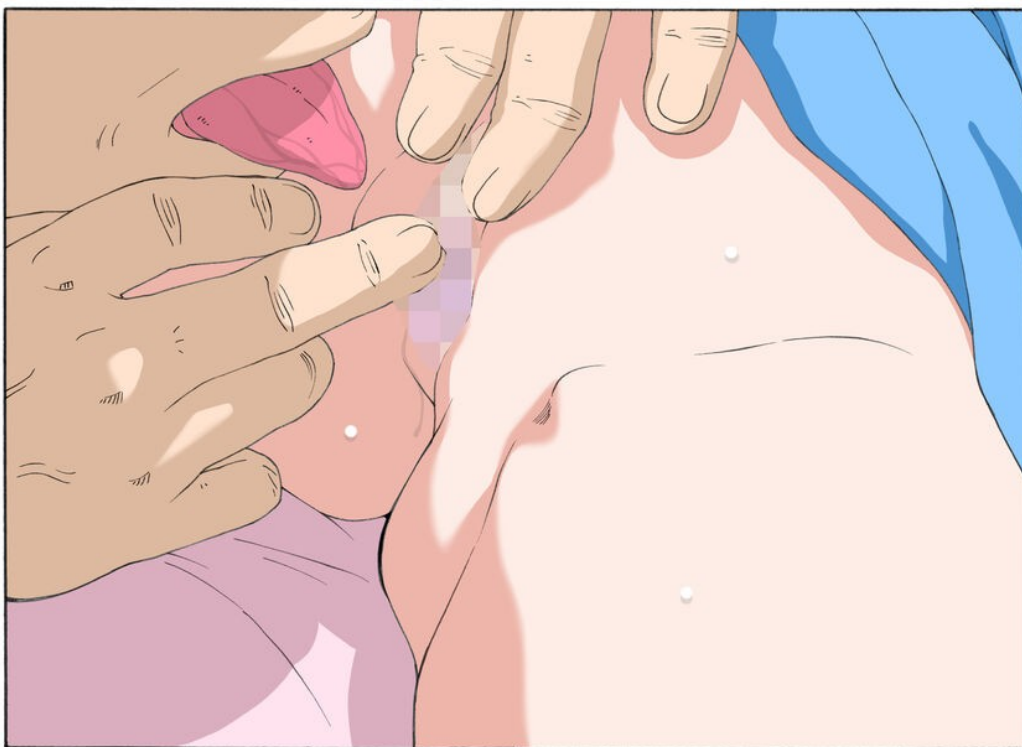
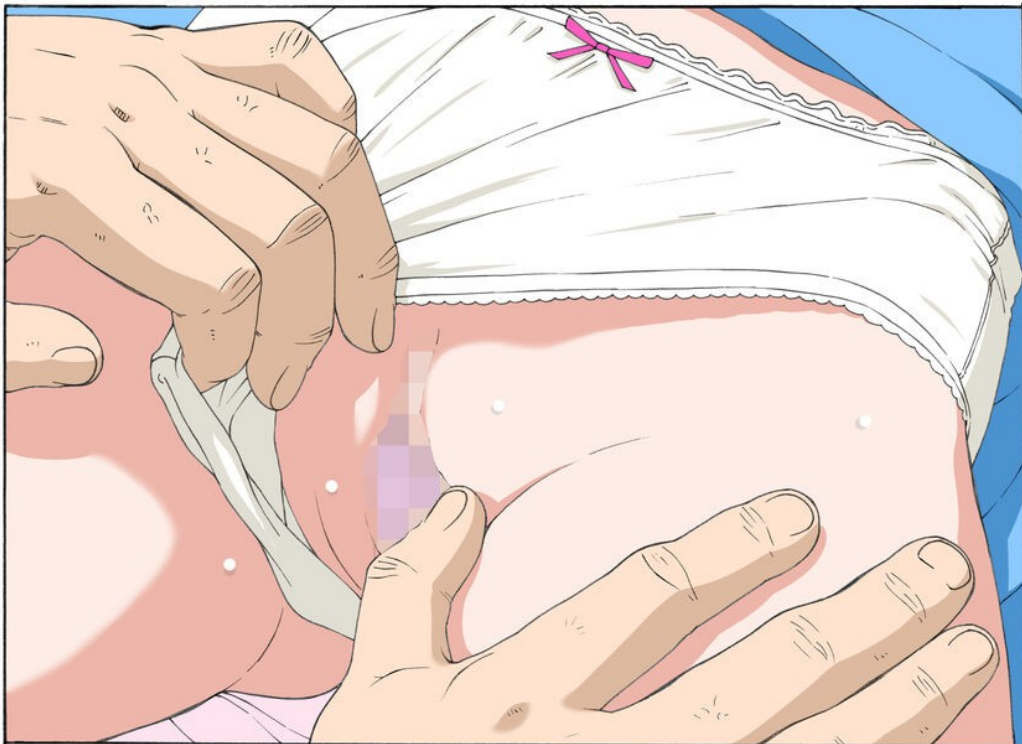
背中をそるのと同時に吐き出す。

「もうすこし…奥が…奥を…」

「これ以上は、指じゃ無理だなあ…どうすっかな」

「…おじさん…ので…して…」

「…ええのか、知らねえぞ」





源は鈴花を布団の上に横になるように促す

鈴花のスカートをめくりあげると露わになった

色白の太ももを弄り、パンツの上からお尻や

股間を指や手のひらで揉みしだく

「ここか？　ここがかゆいんか？」

「…そこ」

小さくうなづく鈴花

脚を開かせパンツの隙間から性器をいじり始める

鼻を近づけ性器の匂いを嗅ぐ

「いっちょ前に女の匂いさせてるな…」

パンツを脱がせ艶を帯びた肉壁を筋に沿って

開いたり閉じたり深く浅く指を沈める

ぬるぬるした体液が肉壁からあふれ出る



「ここがかゆいんか？」

「そこの奥…なかの方…」

源は鈴花の言葉に一唾を飲み

「指入れても平気か？」

「…だいじょうぶ」

源は指を一本二本と増やし膣口から少し奥へと
入れ弄り中をかき回す。

指の動きに合わせて鈴花は荒めの吐息を漏らす
敏感な部分にあたると押し殺していた声が
背中をそるのと同時に吐き出す。

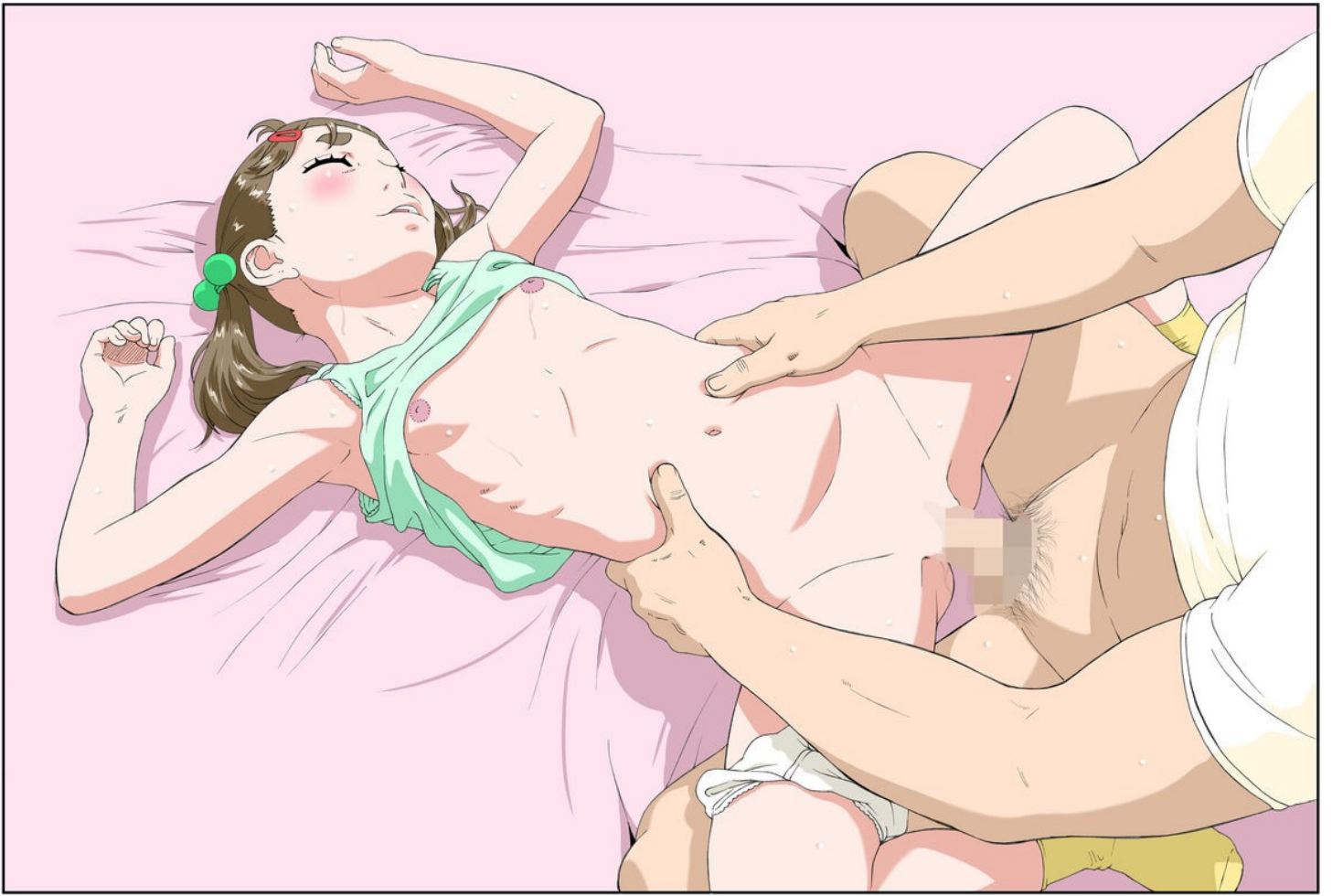
「もうすこし…奥が…奥を…」

「これ以上は、指じゃ無理だなあ…どうすっかな」

「…おじさん…ので…して…」

「…ええのか、知らねえぞ」





源は鈴花の言葉にいきり立ったチ○ポを深々と

膣奥へとゆっくりと押し込む

「ううっ…」

少女の身体には少し大きめのチ○ポが、久しぶりの

姦通により充足感に満たされる

「大きいよ…パパの」

「ぐっ…やっぱせめくな、キツキツだな」

とはいうものの源にとっても久しぶりの女の身体で

未熟な身体ではあるが十二分な満足感で腰を動かす

「はあくたまんねくなく、すぐいっちまいそうだった」

「あっ…あっ…パパ　　パパっ」

「ぐう…だっダメだく出ちまいそうだ、外にしねくと」

「いいよお…このまま、出しても…」

「あく？このまま…？」

「ああ、いいよお…出してえ」

「バカいうなや、出したらまずいべっ」

「だい…じょうぶ…だから…」

「ああ、もうダメだくイクぞっ…あぐっ」

源は溜まりにたまっていたものをすべて吐き出す

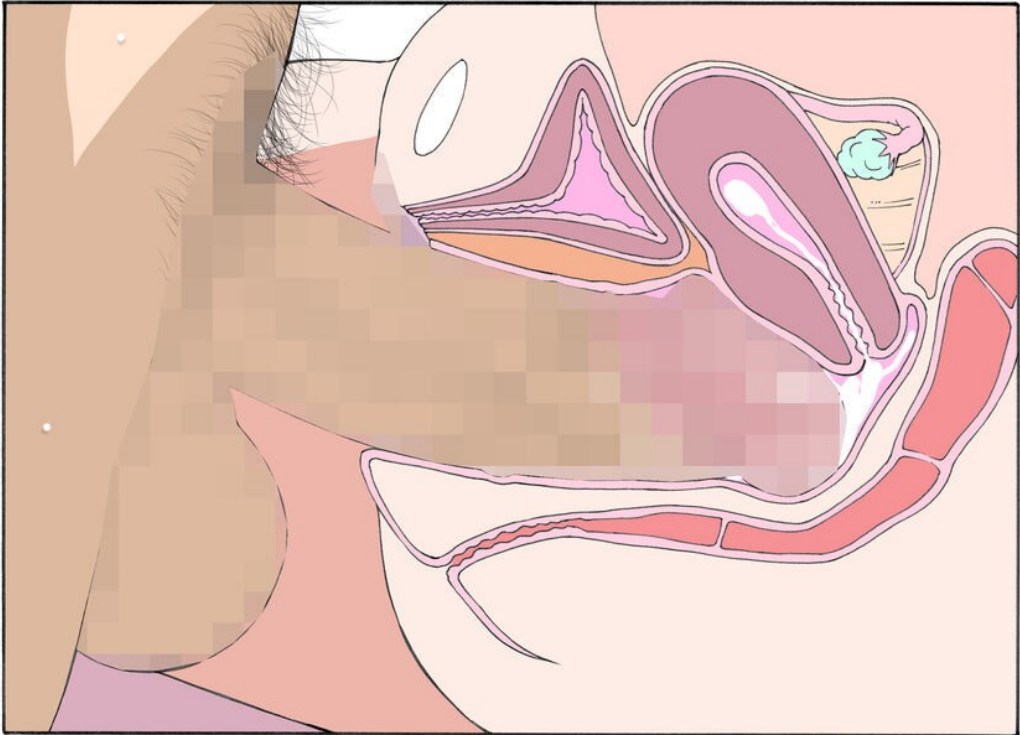
かの様に勢いよく膣内へと射精した。

鈴花は膣内で脈打つチ○ポの鼓動を膣壁を通じて

しっかりと受け余韻に浸っていた。

源のチ○ポが引き抜かれると奥からザーメンが

流れ出る。



【新しいパパ】

期せずして久しぶりのセックスに身を委ね

身体も心も満たされた鈴花であった。

その後も週に何度も公園を訪ね、源の小屋へと

足しげく通い未熟な身体をホームレスの男に預け

再び性奴として調教されていく。

源にとっても滅多にないチャンスであった

以前は家族もいたが人一倍性欲が強めで、嫁に逃げられ

拳句、女性で仕事を失敗し無職となっていたのだ。

足しげく通ってくるこの娘なら自分の性欲を満たして

くれる存在であると確信し、自分好みの牝犬に調教し

思う存分犯し最高の性奴に出来る。





源は鈴花が来るとまず始めにたっぷり
キスをする。

フレンチキスから始まりディープキス

ねっとり舌を絡ませ合い、唾液をすすり合い

鈴花の舌をねぶり、自分の舌をフェラチオ

するかの様に吸わせる

30分ほど繰り返し、その間空いた手を性器や

おっぱいを服の上から弄る。

時には鈴花の鼻をつまんで口で口を塞ぎ

窒息させるような危険な行為もする

源はよりコーフンし荒々しく、鈴花も無機質に

攻めてくる源にコーフンを覚えるのであった。



学校が終わると一度帰宅し、2時間ほどは

小屋に入りっぱなしで源の調教を受ける

土曜日は下校から直接小屋へ向かい、昼食も

摂らずに行為にふけることも…

護に調教されていた頃より鈴花の身体もより

成長し身体つきも丸みを帯び胸の膨らみも

大きさを増してきた。

しかし、陰毛も産毛程度で何より初潮も未だ

来ていない。

それを聞いた源は躊躇なく生ハメ・膣内射精を

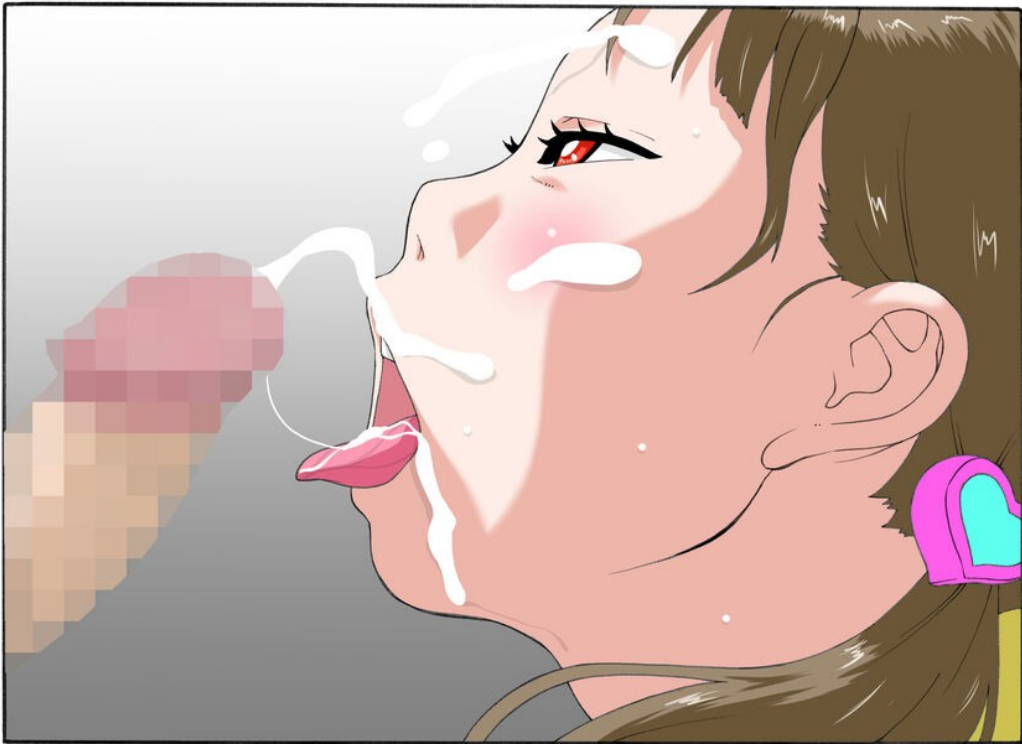
楽しんでいた。

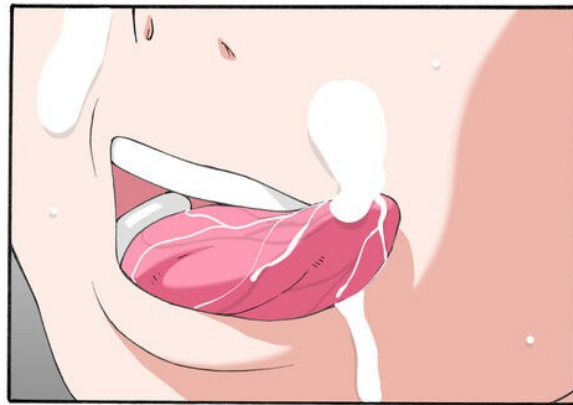
公園内には数人のホームレスが居を構えている

距離を空けてテントを設営していたため、幸い

鈴花とのまぐわいを見られる事も無かった。







そんなある日の事

いつもの様に鈴花と源が小屋の中で

抱き合っていると不意に小屋の戸が開く

「おゝい、源さん…いるかい？」

ホームレス仲間の徳本、通称「とく」が入ってくる

正に腰を動かしてる最中、その声に源が振り向く

抱き合ってる二人を見たとくが驚く

「おわっ…なんだ…あつ、すまねエ…まじか…」

「えっ、あゝ、とくか…かまわねえよ、入れよ」

「えっ、いや…女いるとは思わねえから、出直すわ」

「いいよ、なんか俺に用か？」

「えっ…ああ、醤油が切れちまって借りようかと…」

「醤油か、ちよいと待ってな…」

「悪いな…知ってたら後にしたんだけど…源さん」

「それより、コイツ見てみなよ」

「…ずいぶんわけーな…18くれ〜か？」

源がとくに耳打ちをする

「はあ？…ってまだガキじゃね〜の…」

「びっくりだろ〜」

「いくら何でもその年はヤバいんじゃないの？」

「関係〜ね〜よ、男と女がするのに年がどうだなんて

それにこの娘すげえ好き者だぜ」

「どこで拾ってきたんだよ、親とか心配してんじや

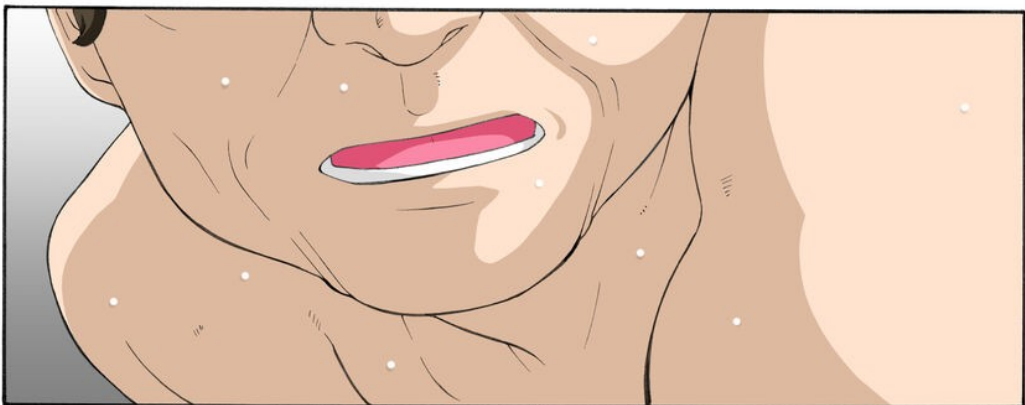
ね〜の？」

「おいおい、別に連れてきたわけじゃねえよ、外の藪で

小便してたらコイツが居て俺のチ〇ポ見てついて

きたんだよ…でまあ、こーなったわけだ」

「はあ？なんだそりゃ…」



「とくもどうだ、やってみるか？暫く女抱いてねー
だろ？」

「はあ？そりゃ…ご無沙汰だけど、いやっ、子〇だろ」

「大人も子〇も関係ねーよ、穴がありゃー！、最高だぜ」

源は責め疲れて半寝の鈴花を起こし、とくに鈴花の
裸体をありありと見せつける、とくの股間が膨れる

「とく、身体は正直だな…ガキ相手にボツキ

してんじゃねーか」

「しっ、仕方ねーだろ…溜まってんだから…」

「ムリしねーで、やってみ？これはこれでハマるって」

「まあ、そんなに言うんなら…一回くらいは…」

「一緒にやるべや」

源はとくを仲間に迎え二人で鈴花を調教することに。

「ところで、この娘の名前はなんて言うんだよ」

「あぁっと、えーと…鈴花だっけかな」

「ふーん、鈴花ちゃんか、かわいいじゃん」

「何だよ、とく…おめえ意外とロリコンってやつか？」

「ばっバカ言うなよ、それでもねーけど…可愛いもんは
可愛いだろ」

「でもなあ…とくよ、結構仕込まれてるぞ、この娘」

「源さんが仕込んだんじゃねえの？」

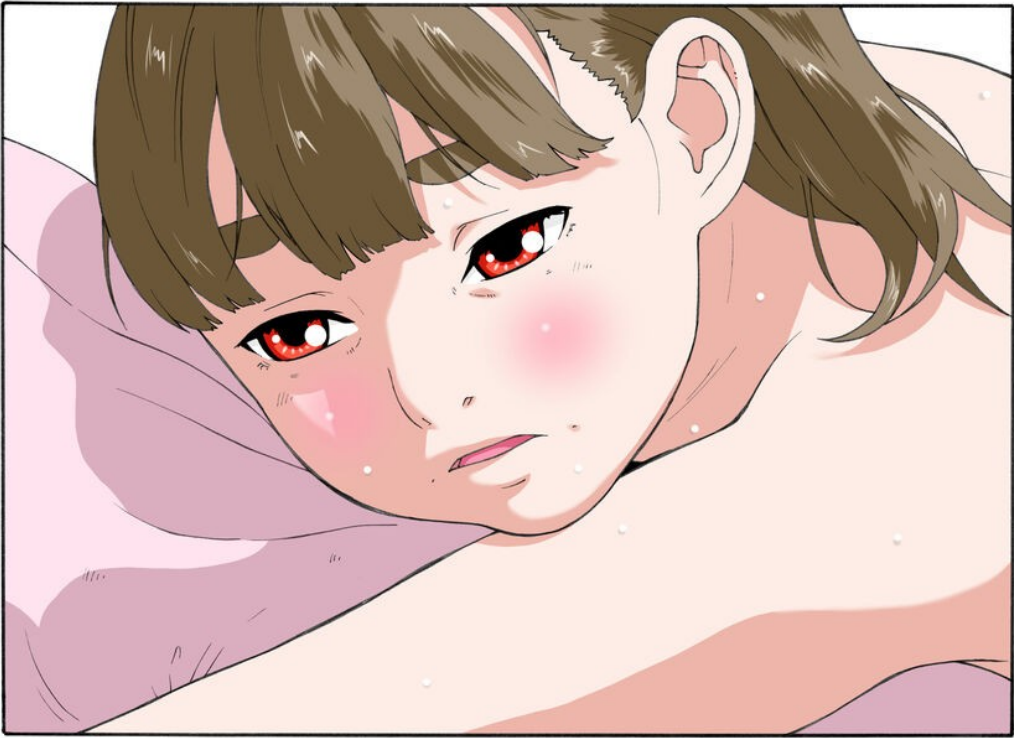
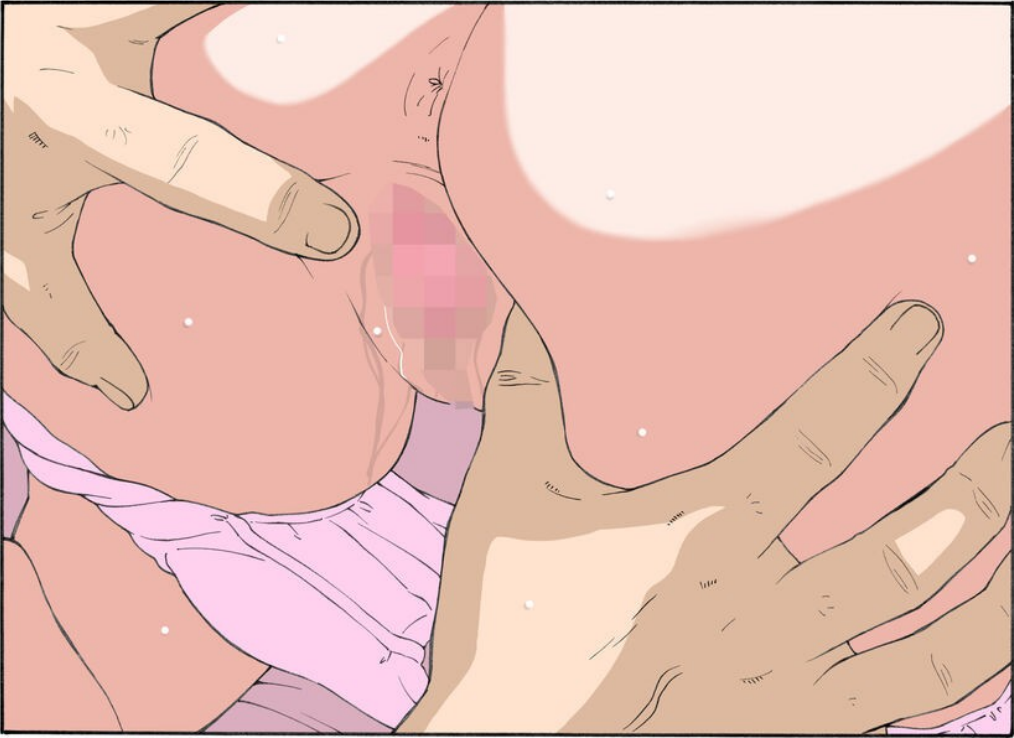
「いやっ、ここに来る前から誰かに仕込まれてた

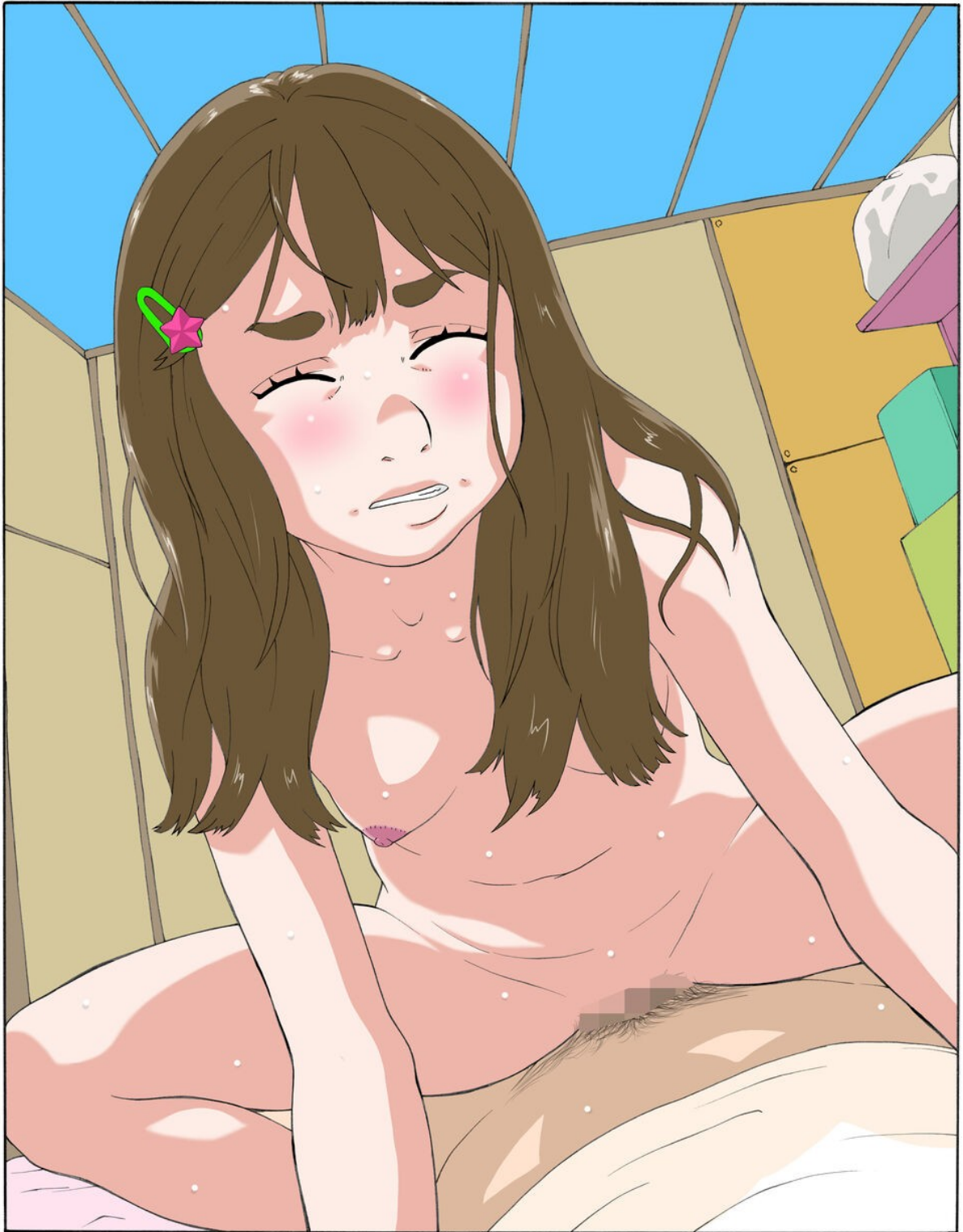
みてえだぞ」

「ふーん、そうなんだ」

「何しても嫌がらねえし、後ろも使えんだぜ」

「可愛い顔してても、身体は大人顔負けかあ」





源ととくは、鈴花が来るたびに代わる代わる

精を注ぎ込んだ

時には二人がかりで…

若いとは言え性欲過多の大人二人から責められ

必要以上の快楽を強いられる。

感度も解放され、連続で絶頂に達する強制絶頂

激しい責めに気を失うこともしばしば…

二人にとっては格好の性欲処理の玩具となる。

「これだけやっても壊れねくのは、すげえな」

「だろ！この小さな身体で全部受け止めてんだぜ」

「これはスゲーお宝見つけたって、感じだなく源さん」

「スゲー娘だぜ、こいつは」

「でもよう…ちよっと気になるのが、時々『パパ』って

叫ぶじゃんよ、ありゃくなんてだ？」

「さあな…わかんねく」

「仕込んだのって…まさか、父…親？」

「どうだろうなあ」

「こいつには親いるんだろ？」

「あ、母親だけって前に聞いたかな」

「親父はいないんだ…ふん」







一学期が終わり長い夏休みに入ったある日

学校の理科教師が町外れの公園で植物採集をしている

この公園は整備が滞っている所為か植物も生え放題

植物採集の穴場として一部の人間が夏場にやってくる

理科教師・相沢(28歳)も汗だくで採集に励んでいた。

源の住む小屋の近くで生い茂った藪の中、ふと気が付くと

見覚えのある少女が一人藪に出来た小道を小屋の方へと

近寄っていく。

相沢が担任を受け持っているクラスの女生徒だった

「あれは…汐美さん、何故こんなところに?」

声をかける間もなく小屋の中へ入って行く鈴花

暫くして相沢は不思議な面持ちで恐る恐る小屋へと近づく

人の声がする、壁の隙間からそっと中を覗き込んでみると

相沢の目に飛び込んできたのは全裸で抱き合う男女

相沢は驚くもついで凝視してしまう

全裸の女性は先程見かけたクラスの女生徒

汐美鈴花であった。

自分が受け持つクラスの女生徒が目の前で

大人と全裸で抱き合っている。

衝撃の事実に関頭が一瞬パニックになり

「えっ?」と言う感覚に戸惑っている

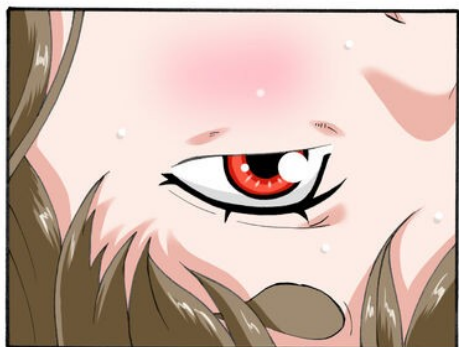
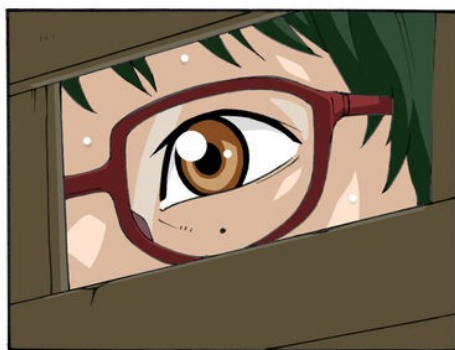
すると相沢の眼鏡にあたった光の反射が

中の鈴花の目に当たり、壁の隙間から

覗いている人物に気が付く

お互いの目が合ってしまう

相沢はすぐにその場を離れ公園を後にする





翌日

今日は夏休み中の登校日で水泳の授業がある

鈴花は久しぶりに会うクラスメイトたちと

水泳の授業を楽しんでいる。

授業中、鈴花はトイレへ行きたくなり水着のまま

トイレへと向かう

トイレの手前で着替えに使用している教室から

担任教師の相沢が出てくるのを見かける

その後用を足し授業へと戻る

授業が終わり女生徒は着替えを置いてある教室へ

向かう

仲の良い女子と談笑しながら着替え始める鈴花

すると異変に気が付く

「…あれえ…?」

「ん…鈴ちゃん、どうかした?」

「えっ、ああ…パンツ…」

「えっ、無いの?パンツ…」

鈴花はとっさにさっき教室から出てきた相沢を思い出す

あの時何かをポケットに入れた様な仕草をしていた事

「ああ、勘違い、鈴花家から水着きてきたから、パンツ

持ってくるの忘れちゃったみたい、でへへ…」

「鈴はドジだね」

「え、パンツ無しで大丈夫、鈴ちゃん?」

「うん…オーバーパンツは持ってきたからそれ履く」

「ノーパン鈴だね」

「八重ちゃんのいじわる」



その夜

相沢の自宅

相沢は公園での一件以来、クラスの女生徒

汐美鈴花の事が頭から離れないでいた

相沢にとっては特段目立つ存在の生徒でもなく

成績もそこそこ良く、おっとりとした人懐っこい

感じに映っていた。

その女生徒があられもない姿で子〇に似つかわしくない

声を上げ男と抱き合っていた。

相沢は魔が差してしまった：教師としてあるまじき行為

鈴花の着替えに置いてあったパンツを盗んでしまったのだ

そして、鈴花の顔、あの日の喘ぎ声を思い出しながら

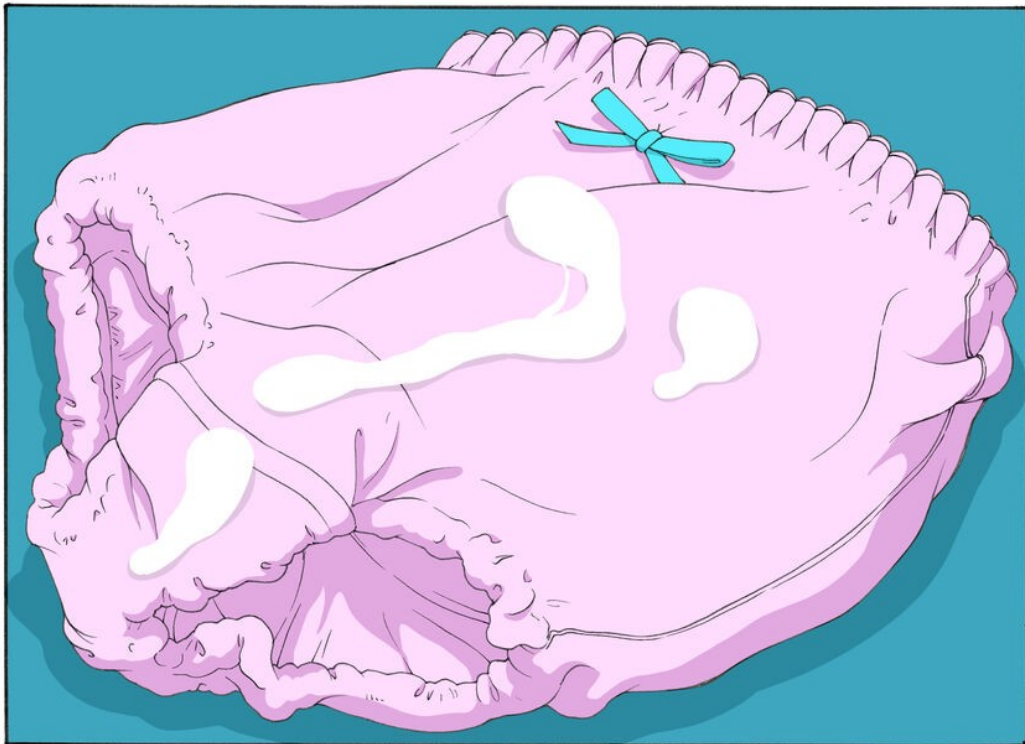
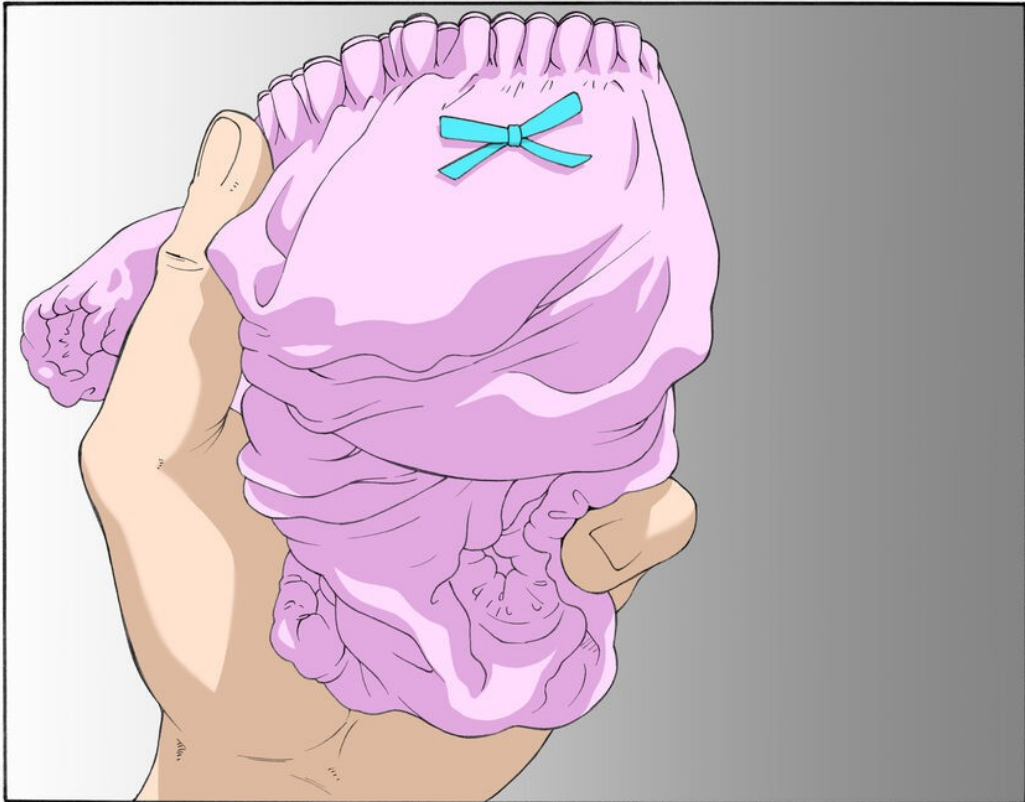
鈴花のパンツでチ〇ポを包み込んでオナニーしてしまう

鈴花のパンツにべっとり大量のザーメンが

浸み込んでいく

相沢は事が済むとパンツを見ながら嫌悪感に

苛まれる



その翌日

2日目の登校日

今日は授業もなく出席と点呼を取った後全校集会を

して下校のスケジュール

全校生徒が下校後、学年の教室の戸締りを確認するため

相沢が教室を廻っていた、自分の教室が最後に教室に

入ると一人ぽつんと机に腰掛ける女生徒に気が付く

相沢は鈴花と気が付き少し驚くが、声をかける

「汐美さんか…下校の時間だよ、早く帰りなさい」

「先生を待ってたの…」

少し焦った表情で聞き返す

「先生を?…どうかした?」

「先生、昨日水泳の授業の時、あたしの下着…持って

行ったでしょ…」

「はあ?、何を言ってるのかな…先生は汐美さんの

パンツなんか持って行ってないぞ」

「やっぱり…あたしパンツなんて一言も言ってないよ」

「あっ、いやっ…」

「先生にあげる、お気に入りだったけど、あのパンツ」

「…」

「あたしのパンツ…欲しかったんでしょ、それに

公園の小屋の中のあたしを見たからでしょ?」

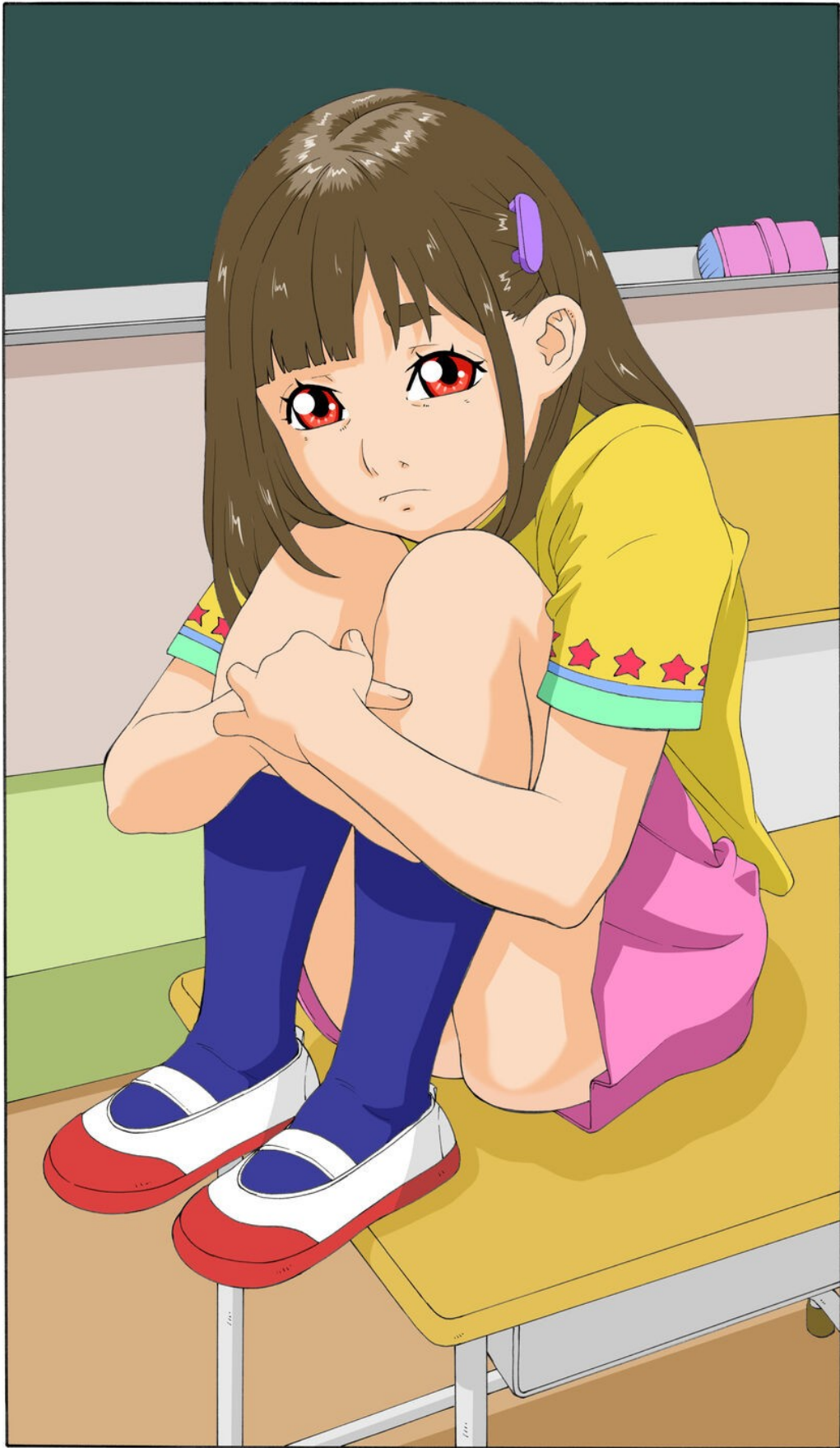
「!?」

「先生と目が合っちゃったもんね…あたしもびっくり

したよ…あんなところで」

「いやっ…まあ…」

「恥ずかしいところ見られちゃった…」



「まあ、あれだよ…プライベートは、個人個人で…

って、ダメだよ君たちはまだ未〇年なんだから、
いかんいかん、何を言ってるんだ私は…とにかく

今日は帰りなさい」

と言いながら振り向く相沢の目に入ってきた

鈴花の姿

机に両手をついてお尻を向け、スカートをたくし上げ

パンツを下ろし性器を突き出している。

一瞬言葉を失う相沢

「なっ何をしているんですか?!」

「先生…したいんでしょ? いいよ…入れても」

「バカなことを…早くしまいなさい、私は教師だぞ

そんなことできるわけないだろ…」

両手で開いた鈴花の性器が艶かしく潤んでいる

「先生…ボツキしてるじゃん…ズボンが膨らんでるよ」

とっさに両手で股間を隠す相沢

「…いやっ…これは違って…」

「先生のチ〇ポ…入れて」

その言葉で何かが切れたように、相沢はいきり立った

チ〇ポを鈴花の膣に押し込んでいた

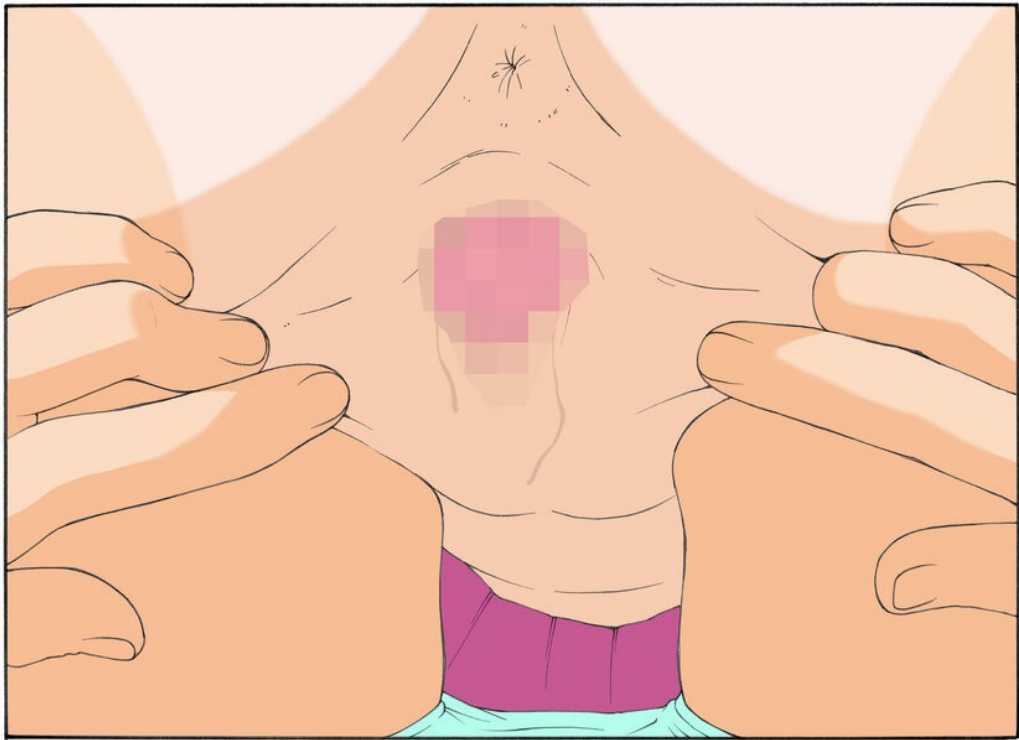
激しく動かす相沢の責めについ声が出る

「ああっ…せん…せ…い… ううん ああ パパ…」

キツメの締め付けと脳内麻薬の様な背徳感で頭が

真っ白になり唯々腰を振り、動物の様な唸り声を吐く

「先生…はげしい…よ」





「パパ…いいよ…気持ちいいよ」

激しい呼吸と共に声を荒げ、膣の奥へ、子宮の奥までも入れ込むかのようにピストンが

激しくなり

次の瞬間

相沢は精を出しつくすように射精を繰り返す
小さな膣から収まりきらないザーメンが
あふれ出て滴り落ちる。

射精しきった相沢は、ふと我に振り返りつぶやく

「私は…一体何をしてるんだ…こんな事」

「先生凄かった、お腹に穴が開くんじゃないかと

思ったよ…先生のおっきいし」

「すまない…こんなのは…ダメだ」



「先生、明日…公園の小屋に来て」

「…小屋に？」

「お昼過ぎぐらいに…」

「何かあるんですか？」

「来ればわかるよ…」

そう言うと鈴花は教室を後に

帰っていく

「先生…待ってます」



町外れの公園

ホームレス源の小屋

指定された時間に足を運ぶ相沢

数名のホームレス仲間と思しき男が上半身裸で

煙草をくわえ煙を燻らしている

ひと汗かいたような表情で談笑している

そこに近寄っていく相沢

小屋の中から人の声と押し殺した様なうめき声とも

とれる荒げた吐息が聞こえてくる

「なに？あんちゃんも御呼ばれ？」

一人の男が相沢に声をかける

「それにしてもあの娘すごいね！体の中のもの全部

持ってかれる感じでたまんねーよ」

「源さん、良いの見つけてきたよな〜ホント」

「あんちゃんも早く搾り取ってもらってきなよ〜」

男に促されて小屋の中へ進むと：

全裸の男に囲まれて鈴花が弄ばれていた

小屋の中は精液や汗の臭いでむせ返るほど、息が

詰まる感じがした

鈴花の日焼け跡がくっきりする身体には

男たちのザーメンと汗と鈴花自身の体液とで

艶かしく何とも言えない色香が相沢の目に映っていた

「あゝ、パパがまた一人来た：鈴花嬉しい」

「汐美…：さん」

「パパのチ○ポ…：はやくちよーだい」

あとがき

本作品はいかがだったでしょうか…

今回コミックマーケットにて発布するはずでしたが
コロナ禍によりイベント自体が無くなってしまい、目的が
途絶えたためのんびりやるか〜と、色塗りを始めたら少し
手間取ってしまい今頃になってしまいました。

同じ作業を繰り返す単純作業は飽きてしまうのと、時間をかけて
やるのが苦手なので(せっかちなんです)気分転換に他の事
やってたのが原因です。

時間をかけてやるのが苦手と言いつつものんびり〜とか
矛盾してる墮落体質です。

次回作にてまたお会いしましょう。

奥付

factor

2020年5月13日制作

モモンガ倶楽部・林原ひかり

✉ okosama@par.odn.ne.jp

Twitter : @momongakurabu

skb(スケブ) pixiv(ピクシブ)

Ci-en(シエン)もやっています

以下の行為を禁止します

- ★著作者に無断で本作品の画像のすべてをコピーし二次使用する事
- ★営利・非営利を問わずインターネット上に無断でアップロードする事
(オンラインでのデジタルコンテンツ委託販売業務提携会社これに含まず)
- ★紙媒体・データ媒体を問わず、未成年者への譲渡・開示行為
違反者に対しては法的措置を実行いたします

注)作品内における固有名詞等、実在の人物・名称とは一切関係ありません
また、事故・事件・事象とは関係ありません

モモンガ倶楽部

